die or alive？

桜木千尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｄｉｅ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ？

【Ｎコード】
Ｎ５７３７Ｄ

【作者名】
桜木千尋

【あらすじ】
ｄｉｅｏｒａｌｉｖｅ？高校生の晶は突然事故死してしまう。成仏できない彼女の前に現れたのは悪魔のようで天使のような少年だったそんな二人の恋愛小説。晶と悪魔天使の恋、そして登場人物の秘密など、色々なストーリーを交えたお話。

―ｚｅｒｏ― プロローグ

世界が一転してる。
おい地球だいじょーぶ？
ところで質問！
みんなはこの質問二つの内一つを選んでね！
いくよ？

1…地球が一転してる
2…私が一転してる

どっちだと思う？
正解は…

「キャアアア！人が車に引かれたわ！！」

「早く！救急車を！」

この状態見れば正解は簡単だよね、みんな？
では皆さん、またお会いしましょうね～〝あっち〟で♪

と言っても…
簡単に逝く事出来ないのが運命よね～。

結局私死んじゃったし。
今私透けてるし。
あ、母さん発見。

良く聞こえない…？

「晶ァァ！何でこんなに早く死ぬのよォォ！」

はぁ…すいません。
いや自分も死ぬとは思っておりません（笑）
（笑）っておかしいよね。
おかしくないけど…。

「バカァァ！」

バカはないでしょ母さんよ……
バカって…（拗）

『うくくくっ…』

「誰？！」

『ん～天使？悪魔？』

「本人が何故疑問符」

変な人と会っちゃった。

最悪～（＊´Д`）

顔は…ハンサムだな。
それは良いとして…。

悪魔天使っているっけ？いや…いないだろう。

自問自答しちゃったし。

『生きたい？』

「はい？」

『だから生き返りたいか聞いてるんだよ』

「そりゃあ…まあ」

『じゃあチャンスを君にあげるよ晶』

「いきなり呼び捨て…」

ムカつく奴だな。
生き返りたいのは山々なんだけどさ無理っしょ。
だって一度は死んだ身だしねえ…？

しかしハンサムだな～。
そんな事言ってる場合か私は。

また一人で突っ込んじゃったよ

『チャンスだよ』

「…」

『じゃあ契約成立って事でサインして』

「何によ」

『これ』

渡されたのは羽根付きペンと英語で書かれた紙。

よ…読めねえ…

名前だけ一応書いとこ。

『はいオッケー』

「で、？」

『あ、内容は僕を捕まえる事だからね。後は～タイムリミットは２４時間でそれまでに僕を捕まえられなかったら即消滅ね♪』

「はぁぁぁ？！おいちょっと待て！！それは書く前にってぇぇぇ？！悪魔天使ぃぃぃ！！！」

叫びは届かず……。

私は元の体の中に戻っていったのだ。

－ｏｎｅ－　（前書き）

では登場人物紹介です

雅　晶　ミヤビ　アキラ

◇性別　♀
◇年齢　１８歳
◇性格　男勝り
◇身長　１７２ｃｍ
◇体重　４９ｋｇ

本編の主人公。
男勝りな性格だが心優しい女の子。
身長が高いぶん女子からの告白も数知れず。
気が強いけど泣きもろい一面も

―one―

『チャンスだよ』

あいつの言葉が繰り返される。

『２４時間でそれまでに僕を捕まえられなかったら即消滅ね』

有り得ない！！！
消滅ってなんだよ？！
ふざけてる！！
あの悪魔天使ぃぃぃ！
地獄へ…

「墜ちてゆけぇい！」

ゴンッ

いった――！！
ここはどこよぉぉ！！
頭ぶつけたじゃない！
つーか暗闇？！
ま…まさか…棺桶？！
で…でなきゃ…

ガチャッ
開かないんだけど…。
まさに鍵だね！！

開けろぉぉぉぉぉぉ！

む…無理だ…開かない……
どうしよう――――！！
このまま焼かれたりしたら生き死だよ?!
それだけはいやぁぁ！

思いっきり棺桶を蹴っ飛ばした
無理だ――――…
ちくしょ――――！！

ガチャッ

ギィ――――…

あ　い　た……???

「開いたぁぁぁ！！」

叫びだした、私。
せっまい棺桶の中で。
端から見ればゾンビだね私の存在は（笑）

目の前にいたのは我が兄貴であった。
兄貴は私の顔を見るなり叫びだした。
まぁなんと非常識な。

「ゾンビぃぃぃ？！」

「失礼な事言ってんじゃねえよバカ兄貴」

「ひぃぃぃぃぃ？！」

「どーでもいいけど…」

私は自分の体を見た。
まさに真っ裸。
胸丸見え……。

ちょっと待てぇ！！
服着させろぉぉ！！

「兄貴！私の部屋からワンピ持ってきて！」

「ワンピ？！分かった」

兄貴を使うのは良い。
虐めがいがある。
五分後兄貴はワンピを持って戻ってきた。

兄貴にしては珍しい黄色のワンピである。
私はそれをせっまい棺桶の中で着替えた。

き、着にく…！！

やっと着れたのは十分後ぐらいだった。

ん……？？
そういや……？？

「兄貴！今何時？！」

「え？八時だよ」

「って事はタイムリミットは明日の八時…か…」

「タイムリミット？」

「ああ兄貴には関係のない事だから」

確かに、そうだよね。
あいつを見つけなきゃ私は即消滅？？？
早く見つけな……

「どしたの？兄貴？」

私をガン見していた兄貴に聞いてみた。

「晶…お前…胸デカいな…」

「何見てんだよ！！」

「ぐふっ？！」

私は兄貴の頬にスクリューパンチを食らわせた。
兄貴はスローモーションのように倒れた。

なんか…スッキリ？
ああ…忠告だ。

「人の胸見るな」

黄色のワンピは胸がくっきり見えるから着たくはなかったのに
（ちなみに私はEだ）

「悪魔天使はどこにいるんだよっっ！！」

「悪魔天使って？」

「兄貴に言っても信じないと思うから…」

「晶？」

あ、母さんだ。
一応は挨拶しとこ。

「おはよ」

「おはよう…って生きてるのぉぉお？！」

お―新鮮な反応。
さっきの『ゾンビぃぃぃ』は素直にウザかった。
つーか失礼だよね。

「風呂…入るね」

「行ってらっしゃい？」

後２４時間か……。
服を脱ぎながら私は小さく呟く。
あいつの名前ぐらい聞いときゃ良かったな～。
その前に見つかるか？

あ―あ…。
意味深だよ――！！
明日じゃ遅すぎるから風呂から上がったら外に出て探そう。

「～♪♪♪」

鼻歌を歌ってみる。
意味ないけど。
そういえば悪魔天使って……

「アキトに似てる？」

アキトってのは…今私が鼻歌を歌ってた曲を歌ってる歌手。
グループ名はｃｈａｎｃｅ。
私は大ファンである。

「顔…そっくりだよね」

携帯を取り待ち受け画面を見る
待ち受けはアキト♪
……でも一応死んでるんだよね悪魔天使も。

じゃあアキト死んだ?!そんな事いやぁ!!

「晶?!どした?!」

「風呂覗いてんじゃねえ!!」

私は風呂から上がり兄貴の顔面にクリーンヒットさせた。兄貴はバタンっと倒れて目を回している。

叫ぶのは…よそう。

ドアを閉めてゆっくりと風呂を満喫した。

―one―　（後書き）

兄貴のキャラがウザいですね…
明日は悪魔天使の紹介になりますのでよろしくお願いします。

―two―

「ん――――！！」

背伸びをしながら私は夜の街を歩いている。
流石にさっきの格好で夜の街を歩くのは禁だ。
危ないだろ？

しかし…現在アキト達はコンサート中だし…。

あ、そういや…

バッグに手を突っ込んでみた。
ひらりと出てきたモノは今日の日付が書かれているチケット。
つまり私はコンサートに行けるという訳だ。

場所は…東京ドーム？
近くて良かったぁ…。

「よしっ！行くぞ！」

「は――…は――…」

やっとついた!!!
私はコンサートの警備員にチケットを見せてゆっくりと入った
もうあと少し……か。
私の席はアリーナ席。
運だけは良いもんで。いそいそと私は席に案内されるがまま座った。

「随分遅かったね」

「一応死んでたからね」

「は?」

隣の女は我が親友。
名前は由香というのである。つまりこのコンサートにいたから私が死んでいたという事は知らない……んじゃ?

彼女もまたパチクリと瞳を大きく開けてびっくりしていた。
これまた新鮮だね♪

「生き返ったって事?」

「うん」

「すごいね?!」

「すごいのか?良く分からないんだけどね」

笑ってしまった。

いや笑うシーンでは確かにない
由香は苦笑いをしてた。
ごめんね。

―＊＊＊―

『みんな～じゃあ最後の曲を歌うよ～！！』

あ、アキトだっ！
良かった～死んでない！
じゃあやっぱり違う…？ん？そっくりだよね？
まさか…

「ねえ由香、アキトに双子の兄弟とかいたりする？？」

「え～？」

「だから！アキトに…」

「キャアアアっ！アキト様と目があった～」

「もう…いいよ」

「？？？」

コンサート中の由香に聞いた私がバカだよ。
後で楽屋に忍び込むか。
それがいい。

双子の兄弟かも…。

悪魔天使って性別は男だよね？不安になるわ。
年齢は…何歳なんだろ。
？？？

あ、アキトが降りてきた。いつものハイタッチの時間になったんだな～。

私も一応手を伸ばしてタッチをした。
あれ？なんか手の中にすっごく違和感がある。

開いてみると手の中に手紙みたいなのがある。

手紙……？

「なんだこれ…？」

「どしたの～？って晶？！それ楽屋に行ける紙じゃない！！どこで手に入れたの？！」

「楽屋に行ける紙？」

「い～な～」

「いや、今貰った…」

「誰によ？！」

「……アキト？」

きぇいいいいい！！

と由香は叫びだした…。
うるさい……。
しかしナイスタイミングとはこういう事を言うのでは??
私はそれを握りしめた。

『今日は来てくれてみんなありがとう!!また会おうな!!』

はい、会いましょう。
ぺこりとお辞儀をしてアキト達は戻っていった。
と、すぐにアンコール。

歌手って大変だよね。

ワァァァッ!!!
と、歓声が上がる。
再びｃｈａｎｃｅが出てきた。
カッコイいな~。

『アンコールありがとう!ではあの曲を!!』

キタ――――!!!
あの曲ってのは私がさっき風呂で歌ってた歌!
題名は『ｍｙ　ｇｉｒｌ!!』っていう歌だよ!!
超好きなんだよね!!

十分ぐらい熱唱してアキト達は戻っていった。
あ~~疲れた!!
楽しかったんだけどね。

「由香?私楽屋行くけど外で待ってる?」

「待ってるよ～」

「分かった。サイン貰えたら貰ってきてあげるからね由香」

「ありがと～！！」

由香に抱きつかれた。
その瞬間香水の香りがふわりとした。
いつも思うが由香はすっごくかわいい。
性格もスタイルも良くて私の自慢の親友でもあるんだよね♪

「じゃあね♪」

「行ってらっしゃい～」

由香に見送られ私は楽屋の前に立っている。
あの紙を見せたら普通に入れたんだよね～。
嬉しい。
てかドキドキしてる。
憧れのアキトに会える！

じゃなくて…私は確認をする為に来たんだ。
悪魔天使について…

コンコン
意をけして私は楽屋のドアを二回ノックした。
しばらくしてゆっくりと楽屋のドアが開いた。

－ｔｗｏ－（後書き）

受験大変です・・・

－ｔｈｒｅｅ－（前書き）

では登場人物紹介第二回♪

十夜　海斗　トオヤ　カイト

◇性別　♂
◇年齢　１８歳
◇性格　超天然＋デレ？
◇身長　１８０ｃｍ
◇体重　５３ｋｇ（痩せ気味）

晶が大好きな少年。
性格は良く実はモテモテボーイ
”ｃｈａｎｃｅ”のアキトの双子の兄。
悪魔天使と晶に言われているのは悪魔か天使か最初分からなかったから．．．らしい。

―three―

「どーぞ」

「失礼します」

私は楽屋にいたアキトに勧められて入る。
楽屋は結構片付いていたのでアキトはきれい好きだという事が分かった。

嬉しいのか頬がゆらぐ。
いやいやいや。
確認する為に来たんだろ私よ。
アキトをちらり。
やっぱりカッコイい！

「ふ～ん…キミが晶か」

「は?！何で名前！」

「内緒」

クスクスと笑った顔が何となく幼い。
悪魔天使に似てる。
と、悪魔天使で思い出した私はアキトに聞いた。

「アキトさんは双子の兄弟とかいます?」

「アキトでいいよ。
うん、いるよ兄貴が」

「もしかして…死んでる?」

「うーん…近いかな」

普通に答えた。
近いってなんなんだろ。

なんか変なんだよね…。

私の名前知ってるし…。
楽屋に勧めるし…。
おかしいよ。

私の事昔から知ってるみたいだ

「くすっ」

「え?!」

「ごめんごめん。実はね、俺晶の事知ってんの」

「えええ?!」

あまりの驚きに有り得ないほどデカい声で叫んでしまった。
アキトは爆笑してるし。

全くもって不覚…。

「何で知ってんのかは内緒だからね」

「それアリ?!」

「とりあえず今日はご挨拶って事で俺のメアド教えとくね♪兄貴について聞きたいならメールしてちょ♪」

「あ、ありがと!後、サインちょうだい」

「サイン?ああお友達の分ね」

さらさらとアキトはサインをミニ手帳に書いて私に渡した。

由香喜ぶよね~!!

私はアキトのメアドが書いてある紙を財布にしまって楽屋を出たのだ。

アキトのキャラが良く分かった気がしたなぁ。

……くくくっ。

「何笑ってるの~?」

「あ、由香?実はさ~アキトってさ~…」

「かっこ良かった?!」

「……そだね。はい、サイン貰ってきたよ」

「キャアアアっ！」

相変わらず煩い。
私はミニ手帳を由香に渡して歩き出した。
なんか…会える気がしないんだけどな～悪魔天使に……。

でも一つ分かったことがあったんだよね。
悪魔天使はアキトの双子の兄貴って事。

今何時だっけ？
……九時かぁ～。
まだ動けるな。うん。

由香には帰らせた方が…いいよね…多分。

「由香は帰る？」

「晶は何かあるの？」

「ちょっと人捜し」

「人捜し？珍しい～」

いや…別に珍しい訳ではないと思うよ？
人捜しなら警察行けとか言われそうだけど…ね。

後タイムリミットは２３時間。
それまでに悪魔天使を見つけなきゃな…！
即消滅とかイヤだし。

消えてたまるかぁぁ！

「あ、晶？」

「ごめん由香！じゃあね！そのサインあげるから！バイビ！」

「バイバーイ！！」

どこに行くか何にも考えてなかったんだけど。
どーしよう…！！

「悪魔天使出てきやがれ～～～！！！」

『呼んだ？』

「出てきちゃった？！」

『呼ばれたら出るよん』

「罠にかかった子狐男！捕まえてや～る！！」

手を伸ばしたらスルリと逃げられた。
くぅ～！悔しい～！
飛んでんじゃねえっ！

『だって飛ばなきゃ捕まっちゃうもーん』

「あんた本当の名前は？聞いとかなきゃ！」

『僕？海斗？』

「だから何で疑問符？」

海斗ね、海斗。
名前も似てるなぁ…。
確かに兄貴だ。
しっかし…何で悪魔天使は死んだんだろ～？

『名前分かったのに悪魔天使のまま？』

「あ～呼びやすいから」

『聞いた意味ないじゃん……』

あ、拗ねてる。
なんかアキトが拗ねてるみたいでかわいい。
って和んでいる場合じゃないんだっつ～の！

捕まえなきゃ意味ないじゃん！
あ～逃げるな！

『昭斗にあったんだ』

「大ファンだしね」

『へ～。やっぱり変わってないね晶は』

「へ？」

『そのままの晶が好きだよ』

と、言って硬直してる私の前から悪魔天使は消えていった。
そのままの晶が好き？
変わってないね？

私の事知ってんの？！
ストーカー？！

「なんか…イヤぁぁぁぁ！！」

一人叫ぶ私。
後楽園の地下鉄の改札口で？

私って不幸？？
うん、不幸だ！！！

－four－　（前書き）

一気に更新しますゞ（≧≦∇≦≧＊）ゝ

―four―

「ただいま…」

「おかえり～晶」

なんか…今日一日でものすごい疲れた（―_―メ

死んで→生き返って→悪魔天使に会って…？

絶対これ夢だよね？

あぁぁぁぁぁぁ！！！

疲れたよぉう！

兄貴を虐めようかな…。

スッキリしなきゃ。

「兄貴～後でいつものしよ～」

「イヤだぁぁぁ！！」

プロレスね。

何固めしよっかな…？

ストレス解消♪

「あら晶おかえり。夕飯食べてないでしょ？」

「食べる～」

「じゃあうがい手洗いしてきなさいよ～」

「はーい」

私の家族って変だよね。
死んだ人が生き返ったってのにそんなに驚かないし……普通の生活に戻っちゃったよ。

と、うがいしながら考えていた私もその一員？

それも結構嫌かも。
あ、じゃあ食事の前に私の家族紹介するね♪

母”琴音”は現在３８歳。ほんわかしてて優しい。
少々泣きもろいけど…。
あ～後は最近冬のソ○タにはまってるとか。
流行遅れだね（´∀`）

次に父”浩一”
母さんと同い年の父さま。
会社では部長で若い女性にモテている…らしい。
でも父さんは母さんしか眼中にないみたい♪

次に兄貴”遊紀”
兄貴は今大学三年生の２０歳だと
つまり私と２歳離れてる訳なんだよね～。
虐めがいがある兄貴です♪♪♪

最後にペットの”イヌ”
犬だからイヌ。
なんつ―ネーミングセンスなんだと言われた。
まぁ呼びやすいから？

って事で家族紹介を終わろうと思ったんだけどね自分の紹介忘れてた。

私”晶”は現在高校生の１８歳
彼氏ナシ恋愛経験ナシの子供。
大ファンのアキトが好きだけどね～～～～♪♪

これで終わり♪♪

ではでは話に戻ろうかと思いますので～〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

「くしゅんっ」

「晶風邪引いたの？」

「大丈夫～？くしゅん」

「今日は早く寝るのよ？分かった？晶」

「ふあ―い」

今日風呂上がってすぐに外出たから風邪引いたのかもね。
あー…鼻がムズムズ。
早く寝よー…。

「所でどうだったのよ?死んだ時は」

「母さんそういう事は普通聞かないよ…?」

「あら、そうなの?」

「母さんってもしかして超天然だったりする?」

「も―遊紀まで~」

拗ねてる母さんは本当に可愛い
両手の人差し指をツンツンと当てながらチラチラと父さんの顔を見てる。
父さんは何故か照れていた。

何故照れる???

「ごちそーさま」

「お粗末様でしたぁ…」

「聞きたいなら明日ね」

「はい!!」

どーみても私よか年下に見えるよ母さん。

はい！！って……。
まじ可愛い。
由香並に可愛いから。
私は布団の中に潜り込む前に歯を磨いた。
さみ…
廊下を裸足だと冷たくてぶるっときた。
早く寝よー……
と、マイルームのドアを開いた時衝撃的映像が瞳に飛び込んできた。
『あ、晶～』
「なんでいんの？！」
『いやね～晶が風邪気味だから添い寝しようかと思いまして』
「必要ないでしょ！」
あ、叫ぶと兄貴がくる！
反射的に毛布を悪魔天使に被せて押し倒した。
あ～…頭クラクラする。
熱でたかも…
ダダダダダダッ
「晶ぁ！？どした？！」

「なななな…なんでもないよ兄貴??」

「そうか…じゃおやすみ晶」

「おやすみ～♪」

ガチャ

あ…あ…あぶねえ～。
ばれたらどうすんだ！
って…捕まえちゃった…悪魔天使！？
やったぁぁぁぁぁ！
悪魔天使確保ぉぉぉ！

もごもご動いてる。

『？！！！！』

「え？ああごめん」

窒息死させちゃうか。
ってもう死んでるし！
これで私…消滅なし！
良かった～
……でも…もう悪魔天使に会うこともなくなっちゃうんだ…

ズキリと胸が痛む。
ん？
何で私痛かったんだ？
ええ？！

『それはだな…晶が僕を好きなん…』

「有り得ない！！」

『そんなきっぱり否定しなくても……』

「で、私消滅しなくても良いんだよね？！」

『そうだね～』

「よっしゃあ！！！」

『そんなに嬉しい？』

「嬉しいに…」

決まってるはず…と言うはずなのに私の口は止まってしまう。

言おうにも言えない。

だって…

だって…

悪魔天使とこんな風にずっといたいと思うから。

この気持ちは…何？

言葉を話さなくなった私を悪魔天使は何故だか抱きしめた。

暖かい……。

心臓の音が聞こえる。

このままが…いい。

『はいはい。大丈夫だよ。僕は消えないから』

「本当？」

『だって僕自身晶の側にずっといたいし』

「うん…」

『天使だろうが好きな人の側にいるのは禁止されてないよ？』

悪魔天使の声が頭の中でグルグル回ってる。

だんだんと意識が薄れて力無く私は悪魔天使の胸に倒れた。

風邪…悪化したかなぁ。

でも…嬉しかった。

悪魔天使の言葉。

ありがとう――

―five―

朝の光がカーテンの隙間から指している。
その光で私は目が覚めた。眩しいんだけど…。

体がスッゴく重い。
頭は痛いし気持ちは悪いし…最悪の目覚め。

ふと隣を見ると目の前にあるのは見慣れた顔。
見慣れたっていうか携帯の待ち受けの顔。
鼻が高くて睫が少し長くて女の子みたいな顔。

えっと～～～…
誰だっけ?
うーーーん……

『…うにゃ…』

あ、動いた。
なんか可愛い。
ああ…そういや…
あのまま寝たんだ私。
悪魔天使と…

ん……?
悪魔天使と?

添い寝?同じ布団で?

それって……

「ヤバいぃぃぃ?!」

叫んでしまった。

そういや時計見た時もう九時だから…学校休んだんだ私。

母さんありがとう。

兄貴いないんだ。

良かった良かった。

「ほら悪魔天使起きて。朝ご飯食べる?」

『…食べる〜』

こうしてると…どこかの新婚夫婦みたいだ。

いやいやいや。

誰が悪魔天使なんかと新婚夫婦にならなきゃいけないのだ?

つーか…昨日夜どさくさに紛れて悪魔天使に告白されたよね?

しかも私

「はい」って言っちゃったし…。

あはは……

『晶?』

「え?!あ、ああ。下下りてて」

『ふぁーい』

ガキかあんたは。
ふぁーいって…（笑）
まぁ…いいや。
布団を直して私も下に降りていった。

顔を洗いに洗面台に向かった私
その横には何故か悪魔天使。席についときゃいいってものを。

しかも…下から目線が物凄く可愛いっ！！！
キャアアアっ！！
無性に抱きしめたくなる私はもしや変態？

『はい、タオル』

「ありがと」

私…肌白いなぁ…。まぁ一度は死んだんだし気にすることは無いね♪
でも血色悪っ！
……不安になる。

『晶？大丈夫？』

「…」

『晶？』

「ごめ…先…食べてて」

『分かった…？』

気分が優れない。
タイムリミットは後１１時間。
本当だったら。
でも時間は止まった。
私が悪魔天使を捕まえたから。
もしかしたら悪魔天使は…

『大丈夫だよ晶』

「え？」

『だから泣かないで』

「私…泣いてた…？」

そういや頬に違和感があった。
それ涙だったんだ。
あはは…泣いてる本人が気付いてないって…。
どんだけ鈍くさいんだよ私って

悪魔天使は私を再び強く抱きしめた。な…な…何してる？！

「まっ…！！！」

『ん？』

「食事…しよ」

流石にこう普通に抱きしめられてる状況に慣れてないんです。
すみませんねえ…。
真っ赤だもん。
顔真っ赤だもん、私。

「早く食べるよ！」

それから３０分ぐらいで朝ご飯を済ましていたんだけど～ずっと目を合わせないようにしてた。
だって絶対目を合わしたら私倒れるもん。
いや…死ぬな。
恥ずかしすぎて。

はぁ……

†††

それからというもの私達二人は何も話さないままでした。
そんな時間も過ぎてゆき現在三時である。

ピンポーン

と、玄関のベルが鳴り響いた。
由香かな？と玄関に出てみると再び私は硬直してしまった。

なんとそこにいたのは、あのアキトだった。

嘘…有り得ないだろ？

―six―　（前書き）

今日はここまでです（笑）
また更新します！

―six―

私は固まった。
ドアを開けた前にいたのはなんと由香ではなく、悪魔天使弟のアキトが立っていたからだ。
……

呆けている私の顔を見てアキトは大爆笑。
失礼な…。

「あははっ！晶ウケる！」

「何で私の家知ってるの？！」

「情報？」

「す…ストーカー？」

「いや違うから」

顔の前で手のひらをひらひらさせてアキトは言った。
兎に角寒いから私の家へアキトを案内した。

あ…悪魔天使！！！
ってそういや悪魔天使だから見えないんだ。
昨日気付いた。

ははは…ばかだ～私。

私の家は結構広い。
ついでに言うと私の部屋は物凄く片付いている。
お掃除好きだからね。

「へぇ～久しぶりに入ったなぁ晶の部屋」

「え?!来たことあるの?!」

「あるよ、一度だけ」

「知らなかった…」

私はお茶を乗せたお盆を机の上に乗っけて一息付いていた。
そういや悪魔天使どこへいったんだろ～?

……もしかしてアキトに会いたくなかったりするのかな?

私悪魔天使の話しかしてないや
もうこの気持ちは分かりきっている自分がいる。
でもその気持ちを言う事が出来ない自分がいる。

……弱虫。
……バカ。
と、自分に言ってみる。
頭の中で繰り返されるのは悪魔天使の言葉。

『僕自身晶の側にいたいしね』

私も側にいてほしい。

『天使だろうが好きな人の側にいたい気持ちは変わらないよ』

私も変わらないよ。
手を伸ばせば届くと思っていた私がいた。
側にずっといてほしいと願う…私がいた。

アナタも同じ気持ち？
いつの間にか私の前から消えたりしないよね？
信じていいんだよね？

と、心に問いかける。
自然と微笑む。
安心？
それもあるけど。
嬉しい？
それが一番かな。

うふふ…

「だ、大丈夫？」

「え？」

「いやさっきから晶ニッコニコしてたからさ」

「ちょっと…ね」

ヤバい！顔に出てた！

大丈夫だろうかこの子…なんて思われたら嫌だな～～～

お茶を手に取り飲む。
温かいモノが喉を流れていく。
美味しい……

「で、私に何か話があって来たんでしょ？」

「うん。兄貴の事」

「あ～悪魔天使の事か」

「悪魔天使？」

「あ―…そこは気にしないで」

あぶねえあぶねえ。
ついつい癖で言っちゃったし…
え―っと…名前何だっけ？？？
海…海…あ！！

「海斗っ！」

「うわっ？！びっくりした？！急に声デカくなるから…」

「ごめんごめん」

思い出し声はかなり大きかったようだ。
アキトがびっくりした顔をしていたのが証拠。

「実はね、晶兄貴と会ってるんだよ」

「へ？海斗と？」

「そ」

ふぅーん…。

ん？？

海斗と会ってるんだよ？誰が？

私が？

嘘だろぉぉ？！

「びっくりしてる？」

魂が抜けている私。

そんな私を揺さぶっているアキトくん。

おいおい、私はこっち。

上だよ上～。

！！！

ちょっと待てい！

本当に私魂抜けてるんじゃないの？！

私今透けてるし…。

何？！

早く戻んなきゃ！

『戻らないで、晶』

その声に振り向く。

やはり悪魔天使である。

……？
何か雰囲気が違う。
嫌だ、何か嫌。
悪魔天使じゃない。

「あんた…誰？」

『海斗だよ』

「嘘、あんたは違う」

そう、違う。

「正体明かしなさいよ」

私は奴に飛びかかる。
簡単に避けられてしまい舌打ち
何か無性にムカつく。

睨み付けると奴の顔はみるみる変わっていく。
アイツの黒髪と姿は変わり美しい銀髪の男になったのだ。

私は固まる。
だってこんなに綺麗な人見たことないから。
吸い寄せられる青い瞳。
……人間とは思えない美しさ

体が小刻みに震える。
私は遥かにこの人の下に生きる者だと確信する。
怖い、すごく怖い。

この人…何者…？

『我は朱皇、神である』

「…神？」

『左様。お前が晶か』

「いきなり呼び捨て…」

『私の事も朱皇でよい。そなたはこの男を知っておるな』

神、朱皇が見せた写真には私の知っている顔があった。

確かに悪魔天使だ。

私は小さく頷いた。

『ならばこやつが何者か知っておるか？』

「悪魔天使…でしょ」

『違う』

「え？！だっ……」

一番始めに悪魔天使が言った言葉がフラッシュバックした。

『悪魔？天使？』

自分はもしかして…悪魔天使の事を全く知らなかったのかもしれない。
何でも知ってるつもりで…いた
私は悪魔天使の何を知っているのだろう?
分からない……。

『この男は悪魔でも天使でもないのだ』

「?!」

『我々と同じだ』

「同じ…って神…なの?嘘でしょ?嘘!!」

『神は人間と恋に堕ちる事は禁じられている』

「嘘よ!!!!」

変な空間の中に、私は一人泣き叫んでいた。

ねえ悪魔天使?
どうしたらいいの?

―seven―（前書き）

更新しなくてすみません！orz

―seven―

「嘘よ!!!!」

私はもう一度、神、朱皇を睨みつけた。
信じられないから。
悪魔天使が神だなんて。

神が人間と恋に堕ちる事は確かに禁じられている…。
それは昔からそうだったんだ。
私は…知っている。
知っていたの。

「そんなの…嘘に決まってる!悪魔天使は神なんかじゃない」

『もう、諦めよ』

「諦めるかバカ野郎!!私はねそんな事で悪魔天使を手放すほどバカじゃないんだから!!」

と、朱皇の頬を平手打ち。
朱皇はびっくりした顔をして私を見た。
女とは思えない力だとでも言いたいのか?
……悪魔天使……

『我に…触れただと？』

「痛かったか？」

『いや…驚きなのだ…我には普通…ああそうか…晶は…』

「晶は…何よ？」

『…』

黙るな！！

空気が少ないなここ。

つーか…いつまで私はここにいなければならないんだよ？！

アキトが心配してるじゃん！！

戻らせろ！！

『もう…手遅れだ』

「何が？！私の体？！」

『それは大丈夫だ』

「じゃあ何が？！」

『こやつの命だ』

と言って朱皇はさっきの悪魔天使写真を私に見せてきた。

悪魔天使の…命？

ってどういう事？

『……裁きだ』

「裁き?!裁きって……何もしてないのに?!」

『人間と恋に堕ちた』

あ〜〜!!!!
そうだった〜〜!!!!
私と恋に堕ちたんでした悪魔天使はっ!!!
バカだよ!!!

「って…助けなきゃ!」

『無理だ…』

「何で無理なのよ!」

『……裁きは既に始まっているからだ…』

「……んなの…」

……!!!!!!
……!!!!!!

「関係ないじゃん!!!助けにいく事はまだ無駄じゃない!」

そうだよ!
まだ…消滅したって事はないかもしれない!
だったら…

だったら…
助けに行かなきゃ！

朱皇は私を見て目を見開き急に笑い出した。
うわ～イメージ違っ！
かわいい。

「なによ?!」

『すまん、分かった晶。お前がこやつを助けたいのなら行くがいい。
但しタイムリミットは3時間だ』

「またタイムリミット～?」

『嫌なら良いのだ』

「分かった!じゃあ朱皇…必ず戻ってきてやるよ二人で」

『分かった。行って来い、こやつのいる場所へ』

朱皇が私に手を翳すと私の立っていた場所に穴が空き私は落ちていった。

もっと優しく送れ!!

「キャアァァ・・・・・」

†††

ドスンッ
と腰でナイス着地。
物凄く痛かった…（泣）
朱皇のバカ～！！

ついた場所はたくさんの木々がある森。
車の音も何もしない静かな森であった。
空気が澄んでいる。こういう場所に住みたかったなぁ私。

いやいやいや。
そんな呑気な事を言っている場合じゃありませんよ私？
タイムリミットは3時間。
それまでに悪魔天使を見つけなきゃ……！

てか…これ一番最初にあった事と一緒じゃん。
こういう運命なのかな私って？
嫌な運命だね～～！

ガサッ

茂みの中から何かがこちらを見ている。
……か、かわいい。
うさぎ？猫？犬？
なんだぁ？あれは？

あ、こっちきた。
ん？？？
なんか姿が人間の姿に……

「え？！な、何？！」

『不法侵入者確保、今すぐ連行する』

「なんやって?!」

かわいい顔してヒドいよこの子!!!
てか何でこーなるの?!ふざけんなぁぁっ!!

†††

ドスンッ（二回目）

また腰打ったぁ〜!!
しかも今度は牢屋かよ〜!!
真っ暗だし!!
まさにお先真っ暗!!
上手いね〜。って一人で突っ込んでる場合でもないから!!

タイムリミットがあるのに〜（泣）！
うううぅぅっ！

『う……』

ん?
誰かの〜声がした〜。
一体誰だろ〜う♪
そおさ♪それはきっとあの人だよ〜♪♪♪

「悪魔天?!あぐっ?!」

勢い良すぎて牢屋の棒に頭を強打した。
涙目になりながら（痛くて）棒から顔を出して手前の牢屋の中を覗いてみる。
……確かに。

「悪魔天使!!!」

『う…』

よーく見ると悪魔天使は両手両足首鎖で繋げられていて血だらけ。
WOW!グロテスク!
てか…大丈夫…なの?
何かこういうの漫画で見たことあるよ?

「悪魔天使!生きてる?!」

『……』

「つーか…死んでるか」

そうだった!
悪魔天使は神様!
だから結局死んでるんだよねえ
あはは!!!

『笑い事じゃ…ない…』

「あ、生きてた!」

『何で…いる…の？』

「助けに？」

うん、助けに。
だって……

「アアアアアッ！」

『？！どしたの？！』

「タイムリミット…3時間」

『へ？』

「私、悪魔天使を助けてタイムリミット3時間以内にこの空間から出なきゃ再び消滅～？」

『えぇぇぇぇ？！』

はい、すいません。
私も忘れていました。
あはは。
笑い事じゃないよ！
早くここから出なきゃ…でも…どこから…？！
うーん…

と、私が探していると入り口のような所があったのだ！！
私ツイてる！！

手を伸ばしてみる。
すると、奥にいる悪魔天使が叫んだ。

『それに！触れちゃだめだ！』

「え？キャァッ？！」

ビリッと…いやもっと強く体に電流が流れた。
その出口に触れた瞬間だった。
私は腰をつき倒れた。
まだ…ビリビリしてる。
……何だよ…これ…。

『大丈夫？！晶？！』

「大…丈夫？」

『そう、良かった。その出口付近には魔法がかけられているんだよ。
それに物凄い強い』

「魔…法？」

『だからここは神でも悪魔天使でも逃げら…』

「ねえ…悪魔天使。悪魔天使は神なの？」

『…』

「黙らないで、答えて」

悪魔天使は固く閉じた唇を動かそうとしない。
私のイライラは募る。
何か手に力が篭もって来たんだよね～！

「ふざけんなぁぁ！」

ビシッ
さっきまで触れただけで体中に電流の流れた扉がバラバラに砕け散った。
その光景に悪魔天使以上に私が驚いていた。
手から血がダラダラと流れていたから。

「ぬぉぉっ？！」

抜けられちゃった？！
私逃げられる？！
やったぁぁぁ！！

でも…

「痛いよぉ！！」

自然と涙が流れる。
（何度も言うけど痛くてね）
痛い！本気で痛い！

「あう～～～っ」

『あ、晶？』

「あ～～～！大丈夫！！悪魔天使自分で鎖取れるでしょ」

『冷たい…』

悪魔天使は首をだらんとして拗ねていた。
私は諦めケガをしていない方の手で魔法の壁（何か変だけど）を壊した。
また血がダラダラと流れていた

も―慣れたよ。

『晶かっこいいね』

「どーも」

『鎖…固いよ？』

「イライラ来なきゃパワー出ないから何か言ってむかつく事」

『うーん…不細工！』

「あんまこないな」

『晶なんて嫌いだ』

「…」

『あれ？晶？』

何かむかつく事言ってとは言ったけど、面と向かって「嫌い」って言われると悲しいね。

……

――――――――――

ポタリ

一滴涙が零れ落ちた。

なんか…キタ。

「嫌いで結構だぁぁぁ！！！」

『目が怖い～？！』

―eight―

『晶すごいね』

「……」

今私たちは牢屋の外を歩き回っている。
そう、あの頑丈な鎖を私壊しちゃったんだよね。
意外とモロかったよ？

そのかわり私の手はボロボロと化した。
でも痛くはない。まぁ大丈夫！

と言いつつもさっきの悪魔天使の言葉に結構傷ついている私。
嫌いだとは言われたくない自分がいた。
全く…弱虫な人間だ。

つーか…

「出口どこだよっ？！」

『ないよ？』

「うえぇぇぇ？！」

私は叫びだした。

だってあり得ないでしょ??
何のために歩いてんのよ私は!

「じゃあどうするの?」

『うーん…さぁ?』

「はぁ?」

『だって僕も分からないんだ』

意味分からない!
だってあんた悪魔天使で神様なんでしょ?!
それ位分かってろよ!
私は怒りを抑えながらもため息をついた。

その時だった。
急に悪魔天使が胸を押さえて膝を地面についた。
つまり倒れた。
え?!何このシチュエーション
あり得ないでしょ?!

「悪魔天使?!」

『ハァ…ハ…あき…』

「ちょっと大丈…ッ?!」

悪魔天使に触れようとした時急に私の頭の中に何かが流れ込んできたのだ。

それは一瞬ではなく、多分長い長い…コト。
私も同じように地面に倒れ込んでしまった。

†††††

真っ暗闇。
あ、悪魔天使がいる。
小さ〜い。小学生？
って悪魔天使がいるってことはこれは悪魔天使の記憶？！

……あの人は…
優しそうな笑顔をしてる綺麗な女の人。
きっと悪魔天使のお母さんなんだろうな。

「お母さん〜」

ふふふ、かわいい〜。
幼少時代の悪魔天使。

また画面が変わった。
今度は中学生時代かな。
アキトもいる。

……仏壇？
ああ…あのお母さん亡くなられたのか…
悪魔天使泣いてる。

「お前のせいだ…」

悪魔天使はそう言って私の方を睨みつけた。
ガキのクセにこわぁ。

てかなんで私の方を睨み付けんのかが分からん。
理解不能。

「アキトのせいだ！」

アキト？
おぉっ？！いた？！
私と重なってたよ！

「兄ちゃん…」

「お前が…母さんを…」

「違っ…」

「違くない！母さんはお前をかばって…」

アキトをかばって…？
って事は悪魔天使のお母さんは事故死か…。
お、悪魔天使が飛び出してった
追いかけ……？

「兄ちゃん！まって！」

アキトもか。
じゃあ行こう。

「兄ちゃん！」

「なんでついてくるんだよ！」

「だって…兄ちゃんと…」

そうアキトが呟こうとした時に信号が赤に変わり横からバイクが飛び出してきた。
アキトは気がつかない。

「アキト！危ないっ！」

しかし悪魔天使が気がついて飛び出した。
そしてアキトを押して…

悪魔天使は…

宙に…

浮き上がって…

花びらのように…

地面に…

叩きつけられて…

私は…凍りついた。
悪魔天使は血だらけで、バイクは逃走。
周りの人の泣き叫ぶ声が耳から離れない。

「兄ちゃんっっ！！」

アキトの呼びかけも虚しくアキトの手を握る力は完全に消えていった。

いや…いや…
イヤァァァァァッ！

†††

『ら…きら…あきら！』

私はその声で元の世界へと戻ってこれた。
自分の方に何か違和感があった
やっぱり泣いていた。

さすがに好きな人の死ぬ場面を見るのはねえ…

『大丈夫？』

「大丈夫よ…。ただ悪魔天使に触れようとした時私の頭の中に悪魔天使の記憶が流れ込んできて…頭こんがらがってる…」

『そっか…』

悪魔天使は私に手を向け私はその手を握った。
力が入らない。
踏ん張ろうとしても膝が言うことを利かず生まれたての子馬みたいな感じである。

「た…立てないぃ…」

『ふ』

「笑うな～！」

『すみませんお嬢様。では出口までご案内』

「え？さっき無いって…ってお姫様だっこしてんじゃねえ！」

『あはは』

私の顔は真っ赤である。
お姫様だっこというものをされたのが初めてで、恥ずかしい。
だって…悪魔天使の顔が間近にあって…。

『ん？どした？』

だから近いっ！
あんたみたいな綺麗な顔が間近にあるとヤバいから！！
見つめんな～！！

『晶顔真っ赤だよ』

「……るさっ！」

『照れすぎ』

「あ、あとタイムリミット一時間だから早くし…」

『不法侵入者発見』

私が言いかけた時目の前には可愛い顔して実は結構イヤな奴がいたのだ。
やっぱり不法侵入者なのね私は

「悪魔天使下ろして」

『だめ』

「早く下ろさんか」

『捕まっちゃうよ』

「大丈夫だから」

私を見て悪魔天使はゆっくりと私を下ろした。
私は地面につくなりその可愛い顔して実は結構イヤな奴に蹴りをいれた。
この世界に来て私技が強くなったんだよね。

『ぐふっ?!』

「人のこと不法侵入者扱いしないでね♪」

私はその可愛い顔して実は結構イヤな奴を蹴飛ばして歩き出す
しかし…その後だった。

テレビの土曜サスペンスで聞き慣れた音と共に私の背中に強い痛みが走ったのだ。

私は何があったのか分からないまま力無く倒れていった。
多分…撃たれたんだね。
痛い…ような気もする。
よく分からないや。

『確保』

という声と一緒に私の意識は消えていった。
この…人殺し…

――――――――

―nine―

やっぱり死んだ？
てか生き返ってまた死ぬ私って不運な人間よね。
ふざけんな！！
ここどこだっけ？
私は誰？みたいなオチはいらないから。

『あなたが晶？』

その声の方を見るとどっかで見た事のあるような顔の人が。
うーん？誰だっけ？

『私は世界の神』

「神様？」

『そう』

「あのどっかで会った事ありません？」

『いいえ』

いやどっかで会った事あるっ…
あああああぁぁぁ！！

「悪魔天使母！」

『？』

そうだ！そうだよ！
確かにこの綺麗な顔は悪魔天使のお母さん！
てか…悪魔天使は？！

『彼はいません』

「何で…」

心の中が分かったの？！って当たり前か。
神様なんだもんね。
……って和んでる場合ではございませんっ！

「悪魔天使母！悪魔天使を返して下さい！」

『断ります』

ズバッと答えた！
あ～悲しいね。
なんかイメージが違いすぎて怖いんですが？
綺麗な顔なのにぃ。

『あなたはこの世界には存在しない者、それは分かってますねあなたと彼は恋に堕ちてはいけないのです。あなたにはあなたが生きる世界があるのです。さぁ送ります。あなたの世界へ』

「いや、です」

『え?』

「そんなの嫌です」

『どうし…』

「恋に堕ちるのは神様と人間でも良いじゃないですか!!とにかく私は悪魔天使と一緒に”私たち”の世界に戻るんだからっっっ!」

私が叫ぶと後ろの方で誰かの声がした。
その声を聞いて私は笑顔になっていった。

『晶!』

「悪魔天使!」

いるじゃん悪魔天使!
私は悪魔天使に歩み寄ろうとした、が、それは悪魔天使母によって遮られた。
銃で撃たれた部分に電気が当てられ私は倒れ込んだ。
これはイジメだぁぁ!

『なりません』

「痛いとこ…攻撃しないで…」

涙目になりながら私は悪魔天使母を見つめる。
悪魔天使母は私に両手を向け何かを呟く。
嫌な予感がする。

離れたくない。
悪魔天使と永遠に離れたくない
私は…悪魔天使と一緒の未来が

良いんだぁぁぁぁぁ！

『……転送』

やっぱり転送呪文かぁぁぁぁ！
私の体が透け始めて意識が途切れてく。
いや　だ　！！！！！！

「わ…た…し…は…消え…るわけには…いかないんだ…よ！」

『……』

「悪魔天使！来い！」

私が消えそうになりながら悪魔天使を呼んだ。
悪魔天使は私の元へ走り飛び込んできた。
驚いたことに悪魔天使母は止めなかった。

『母さん、さよなら』

『……海斗…』

『僕は彼女が好きだ。きっと幸せになるよ』

『……ええ…』

なんかいいねえ…♪
親子っていいねえ♪
私は自然と和みながらその世界から消えていったのでした。

その頃二人を待つ時の神朱皇は焦る。
タイムリミットは後五分。
しかも…ヤバい状況。
はぁ…

『早く帰ってこい…』

心配性なんだよ…俺。
俺って言ってる部分は気にしないでくれ。
……晶、大丈夫か…？
早く…帰ってこい…

†††

何ここ…暗い…
あの悪魔天使母に転送されたのはいいけど、もしかして魔法系だめ…？
ありえない―！

『母さんまた失敗？』

「また？！」

『よくあるんだ』

「どーすんの?!後タイムリミット五分だよ…」

『うん』

うん、じゃねえ!!
バカかお前は!!
素直すぎんのもムカつくから
あああ…消滅いやだぁ。
いやだぁぁぁっ!

『あ、そっか』

「なによぉ…」

『じゃあ一緒だ』

「え?」

『僕も消滅だか…』

「バカね。あなたはもう死んでるじゃない」

『ねえ笑顔で言われるとかなり傷つくんです』

悪魔天使は泣きべそをかき始めた。かなりウザイ。こんな時に。
あああああぁぁぁ!
後三分!
どうせならカップヌードルシーフード味持ってくれれば良かったなぁ…

『お湯必…』

「死んでる人だぁれ？」

お湯必要だね、なんて分かりきった事言われるとムカつく。
そりゃあ魔法瓶で温かいお湯があるわけないし。
って魔法瓶にこだわった訳じゃないよ？

「はぁぁぁ…ねえ悪魔天使魔法使えないの？」

『ん？使えるよ？』

「やっぱり神なの？」

『ううん。ただの浮遊霊。母さんが世界の神になっちゃったから勝手にみんなが僕を神様扱いするんだよね♪』

それを先言ってよ…。
浮遊霊かよ～！
しかし…話してる間に時は過ぎて残り一分。

ヤバいよ～ヤバい。
朱皇～ヤバいかも！！
うぅ…

「って…悪魔天使！魔法で瞬間移動して！」

『あ～…』

「あ～…じゃないわよ！早くしなさいっ！」

『わかった』

悪魔天使は私を抱きしめながら何やら呟く。
どうやらさっきの悪魔天使母と同じ呪文らしい。
早く…早く…早く！！

ぱぁっと視界は白くなり私は静かに瞳を閉じた。

帰ってやるさ！！
私たちの世界に！！！

―last story―（前書き）

最終回です！

今までこちらをよんで下さりありがとうございました！！

―last story―

ぱぁっと視界が白くなり私は静かに瞳を閉じた。

†††

『晶』

という声を聞き私は閉じた瞳をゆっくりと開いた。
目の前には悪魔天使と、時の神（自称）がいた。
やった…やった…！
戻ってこれたんだね！

「悪魔天使！あんたやっぱり凄いね！」

『うん…』

『お帰り二人とも。いや、良く戻ってこれたね』

「どーいう意味～？」

嫌みったらし。
朱皇はでも嬉しそうだ。
タイムリミットそういや何分で止まってたんだろう。

『約一秒かな？』

「あっぶねえ…」

私はおでこに出た汗を拭いて一安心した。
でも本当に良かった。
これで、悪魔天使の、ずっと側にいられる…

そう私が笑顔になっていた時急に朱皇が話し出した。

『さあ…晶。お帰りよ』

「え？何の話？」

『君はあちらの世界の者彼は違う世界の者だから戻ることは許されない』

「ちょ…話が違う！」

『すまない…』

「ねえっ！悪魔天使は？！悪魔天使はどうなるの？！」

不安が再びよぎる。
無言の時が流れ私の不安は膨らむばかり。
ねえ…答えてよ…。
悪魔天使――――――。

先に口を開いたのは悪魔天使であった。

『晶、僕は死んでる人。君は生きる人だから…違う運命なんだ』

「違う運命…」

『だから僕たちは…もう会うことは…許されない…』

空気が凍り付く。
私の心も凍り付く。
さすがに本人からズバリと言われると…。
会うことは許されない。
それを知ってて私はあんたを助けに行ったのよ。

知ってた?悪魔天使。

自然と頬に涙が伝う。
温かい涙が。
目の前がどんどんぼやけ見えなくなる。
離れたくない。
離れたくなんかない。

なんで?

”愛してる”から。

「私は…悪魔天使を愛してた」

『僕も…だよ』

「例え世界が許さなくても私は悪魔天使の側にいたかった」

『…』

「さよなら”海斗”」

そして私の意識は再び消えていった。
これでいい。
これでいいんでしょ？
良かった。
良かっ……。

「ほんっ…とは…っ…ずっと…ずっと…」

一緒にいたかったよっっ……

†††

瞳を開くと目の前には見慣れた顔があった。
耳にはナースの声が。
ここは…病院？
&なんでアキトいる？！

「良かった！晶死んだかと思ったよぉぉ」

兄貴うるさい。

「晶ぁぁっ！」

母さん、ごめんね。
もう大丈夫だから。

「晶、心配かけすぎ」

アキト…。
あれ…泣いてる。
ふふふ。昔から泣きむ…

昔から泣きむし…？
”昔”？
私…アキトの事昔から知っていた……？

「アキト！私…昔から二人の事知って…」

アキトは笑った。
そして小さく首を縦に振った。
私は記憶が抜けていた。
二人に会っていた時の記憶を

今…全部思い出した。
どうして忘れたかも。

「遅いんだよ…バカ…」

私も涙を流していた。

†††

『これでいいんだよね…』

『……うむ』

『本当は僕…』

『実はな海斗、お前はまだ生きてるんだ』

な…何その重大発言?!
僕がまだ生きてる?!
有り得ないよ!だって体透けてどんな所でも飛んでゆけて…

『墓はないだろ?』

墓…はない。
本当に死んでない?!
えええ?!

『ほら、見てみな』

『何を…?!』

朱皇が呟くと自分の立つ真下に病院のベッドに眠る僕の姿が。
まだ…生きていた。
あの時死んだと思って僕は体から抜けたまま。

あの時助けてくれたのは……

『晶……』

―交通事故―

「兄ちゃん！！兄ちゃん！！」

血だらけで意識が朦朧とする僕に話しかける弟。
僕を轢いた車はすでに逃げていった。
痛い…苦しい…
助けて…

「兄ちゃん！あ、”晶”お姉ちゃん！お兄ちゃんを助けて！」

晶お姉ちゃん…？
そっか…晶がいたのか。

「海斗？！病院に早く運ぼ！」

晶は携帯で救急車を呼び近くの病院へと僕を連れて行った。
晶の背中が暖かくて…僕は深い眠りについた。

晶…晶っ…晶！！！！

†††

『泣いてるのか』

『え？』

僕は泣いていた。
悲しいから、晶と会えないのが悲しいから。
涙が止まらない。
…うっう…う…

『じゃあいけ』

『え？』

僕が聞くと朱皇が僕の背中を足で蹴った。
その勢いで僕はその眠ってる僕の体に向かって墜ちていった。

嘘だろぉぉぉぉぉ？！

『じゃあな海斗』

朱皇は笑っていた。
僕は最後の朱皇の言葉が聞こえていた。

『晶を頼むな…』

うん、分かった。
ありがとう朱皇！！！

よし！晶！
待っててくれよ！

そして僕の意識は消えていった

『ぐすん…』

実は寂しい朱皇。

実は晶に一目惚れした朱皇。
実は結構優しい奴。

『晶ぁ！好きだぁ！』

いや、遅いから。
もう二人ともおらへん。
ばかだね。
はっはっはっ～！

『頑張れ、二人とも』

†††

「ねえ母さん、飲み物買ってきていい？」

「俺いくよ」

「いいよアキトは。自分で買ってくるよ」

私はベッドから立ち上がり財布を持って自動販売機に向かった

ミルクティーにするか爽健美茶にするか迷うなぁ……。
どっちにしようかな～。

迷っていると財布から百円玉が落ちた。
その百円玉がコロコロ転がって誰かの足に止まった。

「すいませ……」

顔を見ると笑っていた彼がいた
なんで…
なんでいるの…
私は涙ぐんでその人の顔がよく見えなかった。

でもその人が私の腕を引っ張り抱きしめた時彼だっていうことが分かったんだよ。

”悪魔天使”！！！！

そして自動販売機の前で私たちはキスをした。

あなたは一度死んだことありますか??
そして”運命”を信じますか??

もし好きな人を失った時あなたに質問です。

ｄｉｅ　ｏｒ　ａｌｉｖｅ?

―last story―（後書き）

桜木千尋です。
こんにちは！

もう…こっちは作ってあったのですが更新をキミ幸の方に回してしまったので…

すみませんでしたぁぁッ！！

最後ですが、
どうかどうか、キミに幸あれ！もよろしくお願いします！！

それでは！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5737d/

die or alive？

2010年10月28日03時38分発行